

昭和61年7月1日～7月21日  
大学図書館2階展示ホール

## 茶室おこし絵

茶室は、一般的に茶事を行なう室の呼称であるが、それに付随するあらゆる建物を含めて、茶室建築あるいは茶室といわれる。古くは、茶湯座敷・教奇屋・囲い等といひ、茶室と呼ぶようになったのは、江戸期以後である。

茶室は、作者各々の茶風や意図により組立てられるが、大方、草庵茶室と書院茶室の二系統に大別される。

四畳半を基本として、四畳半以下を小間、四畳半以上を広間という。

茶室おこし絵とは、紙を裏打ちして切抜き、立てて組み合わせるようにした模型である。茶庭の設計などに利用されたものらしい。

今回は、この茶室おこし絵を組立て、展示する。

- 1 高台寺傘亭（からかさてい） （茶室おこし絵図集 1）  
京都市東山 高台寺 千利休好み  
別名「安閑庵」（あんかんくつ）と呼ばれ、時雨亭とは、中廊下でつながれ、一つの纏まりをつくっている。茅葺宝形造りの建物。  
「大日本寺院総覧」に、「時雨亭、傘亭共に廟舎の東山上にあり。桃山城より移す。両亭の間、土廊を架せり。千利休の好みにして、土廊は小堀遠州の作なり。」とあるが、確証は定かではない。
- 2 高台寺時雨亭（しぐれてい） （茶室おこし絵図集 1）  
京都市東山 高台寺 千利休好み  
前記の「傘亭」と中廊下で一つの纏まりをなす。茅葺入母屋造りの建物。  
名前の由来は、堀口捨己氏によると、「（傘亭は）寄棟造り宝形造の小屋裏が、傘の骨のように見えるところからであり、またそれに因んで、他を時雨亭と呼んだのであろう。」と推測している。
- 3 恵観山荘（えかんさんそう） （茶室おこし絵図集 6）  
鎌倉市 恵観好み 長四畳・四畳半（東側の茶室）  
恵観は、一条昭良〔慶長十年（1605）～寛文十二年（1672）〕の剃髪後の号。恵観山荘茶室は、京都西賀茂に、慶安五年（1652）ごろ建立され、昭和三十四年 鎌倉の宗偏流家元山田宗圃邸に移築された。  
この茶室が、最初に記録にあらわれたのは、「隔冥記」正保三年十一月三日の条で、「隔冥記」の筆者法林が、恵観と対面し、この茶室で、茶の湯を行っている。天井は綱代（あじろ）組み、床柱は椎、棹縁は赤松である。

- 4 大徳寺高林庵茶室（こうりんあん） （茶室おこし絵図集 9）  
京都市紫野 大徳寺 紹鷗好み 四畳半  
高林庵は、寛永期に、片桐石州〔大和国小泉の藩主 片桐石見守貞昌（慶長十年（1605）～寛文十三年（1673））〕によって、大徳寺第八十五代の住持 玉舟宗璠〔慶長五年（1600）～寛文八年（1668）〕を開基として建立された。この高林庵の名は、片桐石州の別号ともなっている。  
茶室は、世に数少ない武野紹鷗〔文亀二年（1502）～弘治元年（1555）〕好みの茶室を伝えるものの一つである。勿論、紹鷗好みの茶室をそのまま再建したのではなく、片桐石州あるいは、藤林宗源の手によって若干の改修が加わったといわれる。

- 5 慈光院茶室（じこういん） （茶室おこし絵図集 9）  
奈良県大和郡山市 石州好み 二畳台目  
慈光院は、片桐石州が、両親の菩提を弔うため、大和小泉に建てたものである。高林庵と同様に、玉舟宗璠（春睡）を開基として、寛文三年（1663）頃建立され、茶室は、その七年後の寛文十一年（1671）に建てられた。

- 6 表千家不審庵（ふしんあん） （茶室おこし絵図集 2）  
京都市 千利休好み 三畳台目  
不審庵は、表千家を代表する名席で、建物は、柿葺きの切妻屋根、柿葺きの庇（ひさし）を架し、庇の上を竹の四つ目組みで押さえ、突き上げ窓を開く。  
この不審庵は、千利休が初めて作って以来、取りこわされたり、焼失したりして、形・位置とも変っている。現在の形は、江岑宗左〔元和五年（1619）～寛文十二年（1672）〕の作ったもの。

- 表千家残月亭（ざんげつてい） （茶室おこし絵図集 9）  
広間（十二畳）  
残月亭は、表千家の中心をなす書院である。

- 7 裏千家今日庵（こんにちあん） （茶室おこし絵図集 9）  
京都市 千利休好み 一畳台目  
今日庵は、裏千家を代表する名席で、正保三年（1648）に建てられた。千宗旦〔天正六年（1578）～万治元年（1658）〕の好んだ一畳台目、向こう切り、壁床の席である。現在の建物は、天明八年（1788）の火災で類焼後再建されたものである。壁の腰張りは、反古紙を張った簡素な詫び席である。

\* 茶室おこし絵図集 （791.6-1）  
東京 墨水書房 昭和38～42年刊 12集（50図） 各集に参考写真・別冊「解説」あり  
各項の説明は、この「解説」及び「図説茶道大系 第4巻」によった。